

Title	3-3 地球物理学科の思い出 (3. 思い出に残る京大の講義・演習・実験・論文指導等)
Author(s)	小林, 芳正
Citation	京大地球物理学研究の百年(III) (2011), 3: 114-115
Issue Date	2011-10-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/169924
Right	
Type	Book
Textversion	publisher

地球物理学科の思い出

小林芳正（1958 年卒）

地球物理学科の授業：1956 年 4 月に地球物理学科に進級した。当時の地球物理学科は北部構内ではなく、本部構内の時計台の西側にあるレンガ造の建物内にあった（4 回生の新学期に北部構内の新館に移転した）。小学科なので講義室もごく小さく、長テーブル 2 基が 3 列並んでいる程度だった。3 回生は 8 人だったから、受講者は全員が出る授業でも 8 名プラス α に過ぎない。 α は留年者や他学科からの聴講者、それから他大学から編入してきた大学院生などである。新 3 回生全員が同じ科目を取るわけではないから、聴講者数は平均 5~6 名だったろう。きわめて家庭的なのはいいが、こういう少人数の教室では居眠りも出来ない。学生の一人が遅刻したりすると、「きょうは〇〇君がまだだね。もう少し待とう」などと講義を始めない先生もいたから油断できなかった。あるとき気象学の滑川忠夫教授の講義に遅刻して出席したことがあった。先生がじろりとにらんだのはわかったが、ちょっと小さくなって座ったらすぐに講義が終わってしまった。僕は自分の目覚まし時計が遅れていたことに気づかず、1 時間半近くも遅れて入室したのである。受講者がほんの数人だから、こういうことがひどく目立つのだった。

こんな少人数の学科だったから、粗密はあったものの同級生はお互いにみんな仲良かった。試験の前などは、みんなで黒板を使って、予想問題を議論しあったりした。あるとき僕が地震学の問題を予想してその回答をみんなに解説したりしたところ、その予想的中して、気象学志望の原田朗君（後に気象研究所長）が僕よりよい成績をとってしまったことがあった。もともと彼に実力があっただけの話かもしれないが・・・。

卒論の希望講座がかち合った時も、57・8 年当時は不景気で求人もほとんどなく、就職先の受験希望が競合した時も、誰に割り当てるかはいつもじゃんけんで決めた。僕は、そのじゃんけんのすべてに勝ち残り、希望通りに第 4 講座に進み、みんなに激励されて鉄道技術研究所の入社試験にも臨んだのだった。くじ運はよい方でない僕が、このじゃんけんだけは全部勝って、その後の人生が決まっていたということとはわからないものである。

3 回生の授業は、固体地球と流体地球志望者で別れることもあまりなく、ほとんど一緒に受講した。その中で印象に残っているのは速水頌一郎教授の陸水学の講義だった（あるいは 4 回生になってからだったかも？）。速水先生は中国大陸での研究生活が長く、揚子江の洪水波について講じられた。その哲学的な考察、エレガントな解析にすっかり魅せられ、自分も将来、こんな研究が出来れば・・・と思った。

第 4 講座はもっと实际的だったから、在学中にそんな素養は身に付かなかったが、その頃から抱いた願望が、鉄道技研に就職してからの僕を数理物理学に傾斜させた。その頃に指導者もなく暗中模索でやった勉強が、のちに地球物理学科で、この僕がおこがましくも「弾性波動論」を講じるようになったときに少しは役立ったかもしれない。

弾性波探査実習：実習は、別府の弾性波探査、紀州鉾山の高周波弾性波探査、金沢の電気探査などいくつか経験したが、とくに思い出すのは別府での実習である。別府には 3 回生の春と夏の 2 回、それぞれ 2・3 週間ぐらい行った。当時は実習といっても大学にそんな予算があるわけもなく、佐々憲三教授がどこからか受けられた委託調査に学生も参加させて、その中で仕事を覚えさせようというものだった。

別府の仕事は、別府市の西郊、城島（きじま）高原で温泉を見つけて欲しいという関西汽船の委託調査だった。調査主任は久保寺章助手（後に京大教授）、大学院修士課程の狐崎長琅先輩（後に秋

田大教授)、学生は僕と川本整君(後に大阪工大教授)、それに現地に近い桜島火山観測所から大学院博士課程の加茂幸介先輩(後に京大教授)または吉川圭三先輩(後に京大教授)が加わった。

関西汽船の仕事だから、行き帰りとも関西汽船のボーイつきの2等船室が用意され、天保山発の夜行の汽船でふかふかのベッドに初めて寝た。朝起きるとちゃんと靴が磨いてあった。仕事は久保寺さんの指揮の下、オペレータは電子回路の得意な狐崎さん、その他、測線伐採、地震計の配置、結線などは加茂さんや吉川さんの指導のもとに僕たち学生がやった。現地採用の作業員も数人使った。作業員といっても当時はプロの土方で、一人の親方に率いられた数人の威勢のいい若い衆からなり、甘い顔をしていたのではなめられてしまって使えなかった。

宿は関西汽船所有の城島高原ホテルという小さいホテルだった。ホテルに泊まったといってもわれわれが泊めてもらったのは、客室ではなく付属の布団部屋のような別棟である。それでも食事はホテルの定食だから学生には贅沢なご馳走だった。そんなところに何週間にもわたって若い者が滞在するのだから、ホテルのcockさんや女中さんとすっかり友達になってしまう。僕たちよりちょっと年上の姉とちょっと年下の妹の姉妹の女中さんと僕たちはすぐに仲良くなり、休日に別府まで一緒に映画を見に行ったりした。戦艦大和の乗組員だったという森番のおじさんの話も面白かった。

後に阿蘇の火山研究施設に赴任してから、妻と一緒にやまなみハイウェイをドライブして城島高原まで行ってみたが、すっかり様子が変わってしまって、昔のおもかげはなかった。

物理探査の訓練は、のちに鉄道技研に勤めて、新幹線関ヶ原トンネルや北陸線敦賀トンネルの掘削前の地震探査に参加したとき役立っただけでなく、ずっと後になってもう一度役立ったことがある。1973年に国鉄を辞めて京大(防災研)に戻った。大学では鉄道技研と違って、補助者が一人もなしで研究しなければならなかった。そのとき、一から十まで、自分ひとりで出来るのは物理探査しかないことを思い知らされた。だから、僕の大学での研究は物理探査から始めるほかなかったからである。



写真 紀州・妙法鉦山における高周波地震探査実習時の狐崎先輩(左)と小林(右)。
このときの調査結果が狐崎さんの修論になった。